

保健学と質的研究

質的研究に胡散臭さを感じる人々に応えて

鎌倉 矩子

キーワード (Key words) : 1. 臨床研究 2. 質的研究 3. 語りの分析

はじめに

質的研究になじみのない人々にとって、質的研究はなにやら胡散臭いものに見えるらしい。私はかつて、「質的研究? ケッ」とある人がつぶやくのを聞いたことがあるし、その声は今も耳に残っている。

私は、質的研究の専門家ではない。またそれについて正規の教育を受けた者でもない。しかしいつの間にか、気がつけば、質的研究と言われるものの近くへ歩み寄っていた。そうか、こういうのを質的研究というのか、と気づかされ、それからは意識してテキストを読んでもみた。院生とともに、いくつかの質的研究を手がけもした。そういう経験の中で、質的研究に対する私なりの姿勢は作られてきた。いや、作られつつある。

本稿では、なぜ私は質的研究をするようになったか、保健学の分野でそれに惹かれる者があるのはなぜか、質的研究とはそもそも何なのか、そして質的研究者は何をを行い、どのようなジレンマを抱えているのか、を述べる。それによって、質的研究に胡散臭さを感じている人々の不信を、少しでも払拭することができればと願っている。

私はなぜ質的研究をするようになったか

・私が知りたかったこと

私は、縁あって作業療法という保健学の一分野に身を置くことになった者である。作業療法では、肢体不自由者から脳神経障害者、精神障害者までさまざまな人を扱う。しかし、実際に臨床活動を展開しようとする、頼るべき知識があまりにも少ないことに気づかされる。少なくとも私は、すぐには答えの得られないたくさんの疑問に直面した。

たとえば、「手の巧緻性の訓練をしてください」という依頼を受ける。だが、どうなることが巧緻性ありと言

えることなのか、はっきりした答えは見あたらないのだった。また、脳性まひ児や脳血管障害の患者に手の機能訓練をしたところで、それが必ずしもその児(人)の作業的能動性を引きだせるわけではなかった。ひとは発達過程において、作業の能動性をどのように獲得するのだろうか。それも知りたいことのひとつだった。半側無視の患者は世界をどのように受け止めているのか? 老人性痴呆の患者は、かつての能動性をどのようなかたちでとどめ、あるいは失っていくのか?.....山ほどの疑問がいつも私の中で渦巻いていた。

・ひとの手を見つめて

1976年から1986年にかけて、私は目覚めている時間の約半分を手の動作研究に費やした。ひとは5本の指をもつ手をどのように使うのか、その全貌が知りたかった。そのために私は、手の動きとかたちの類型を探ることにした。

選んだ手段はきわめて原初的なものである。電気角度計をすべての関節につけることは不可能だったし、たとえ可能だったとしても、手のフォームや動きをパターンとして見ることにはうまく役立たなかつただろう。私は写真と16mm映画を使い、判断は目視に頼ることにした。最初にとりかかったのは把握の静止のフォームである。国語辞典の中の物品すべてを選び出し、これを100余種に絞ってから、把握107課題を設定し、これを7人の健康被験者に実行してもらった。そして1課題ごとに手のフォームを5方向から、また接触痕を5方向から、写真に撮影した。来る日も来る日も現像に明け暮れた結果、つごう7,490枚の写真ができた。それを体育館ほどの大きな部屋に並べて分類にとりかかった。それはやり直しの連続と決断を迫られる作業だった。そして結局、ここから把握の類型14種(上位分類4種)が抽出された(鎌倉ほか, 1978; Kamakura, et al., 1980; 鎌倉, 1989)。

次にとりかかったのは非把握の静止のフォームである。時間は2倍かかったものの、手法は同じである。写

真14,420枚から21の類型（上位分類8種）が取り出された（松尾・鎌倉ほか，1979；鎌倉，1989）。

3番目の、動きのパターンの抽出には16mm映像を用いた。課題は97種、被験者は5名。判断材料は、鏡を組み合わせさせた空間の中を動く手の複数映像である。しかし、15を超える関節の動きの、無数の組み合わせから成る手の動きをどのように表記すればよいのか。分類作業は難航した。6年目のある日、ようやくある考えがひらめいて、すべてを整理できるめどがついた。それまでの全てを捨ててはじめてやり直し、ようやく体系だった分類へとこぎつけることができた。取り出した基本類型は16種である（鎌倉ほか，1986；鎌倉，1989）。

この一連の研究を終えたとき、私の中には一種の爽快感があった。もちろんこれは私流の手の見方ではある。しかしこれによって、手のかたちと動きはほぼ完全に、「私の胸の中に落ちた」のだった。これでやっと手のかたちと動きの表記が、そして訓練メニューの考案ができる。原初的だが、これしか方法はなかったという思いが深く胸の中にあっただ。

それより数年前、把握の類型化が一段落したとき、私は結果をある学会誌に投稿していた。しかし結果は、「なしのつづて」であった。約1年後、それは突如として掲載された。編集委員の一部に強い抵抗があったのだと、後から非公式に知らされた。医学や保健領域の研究者の間に実証主義の気風が満ちみちていた、1970年代の話である。

保健学領域で質的研究が行われる理由

・臨床家が考える研究疑問の形式

いまあらためて思うのだが、保健医療の臨床家が心に思い浮かべる「研究疑問」には、そもそも2つのタイプがあるのだと思う。

そのひとつは、「介入法Xは患者の状態を変えうるか」という類の疑問であり、もうひとつは「事象Xとはそもそも何なのか」という類の疑問である。私はこれをそれぞれ、「命題検証型疑問」と「絶対疑問型疑問」という名称で呼びたいと思う。同じことはすでに清水（1997）が、タイプAの疑問とタイプBの疑問という言葉で表現している。そしてこの2つの研究疑問の間には、特に優劣はないのだと私は思う。

「命題検証型疑問」は「仮説検証型研究」へと進展する。これを行うには、事象の数値化と統計学的推論が必要である。それゆえにこれは、「量的研究」と呼ばれる。

一方、「絶対疑問型疑問」は、まだ仮説を持ち合わせない段階の疑問であり、研究の結果として仮説を生み出

すことを期待するものである。すなわち「仮説生成型研究」へと進展する。実施にあたって研究者は、観察所見の記述記録や映像記録、対象者の語りの記録など、たとえ数値化できない材料であっても、必要と思われる材料のすべてを採取する。そしてそれらのある観点にしたがって整理し、一定の見解を得ようと目論む。これが「質的研究」と呼ばれるものである。

私は大学院生の研究指導にあたる時、その人自身が抱く疑問を大切に、それを研究疑問つまり研究可能な疑問へと精緻化させることを心がけている。広島大学に在職中、1996年から2000年度にかけて、私は都合14名の院生指導にあたったが、その14の研究疑問の中で、量的研究に適していたのは4、質的研究に適していたのは7、併用がよいと思われたもの3であった。大まかに言えば、6割は質的研究向きのテーマだったのである。標榜領域は「高次脳機能障害リハビリテーション学」、院生たちの出身分野は作業療法学が12人、言語聴覚障害学が2人であった。もちろんこれは、私がかかわった一部の院生の話に過ぎないが、しかし少なくともこれは、保健学領域の一部において、質的研究への志向がかなり高いことのあらわれである。

・質的研究志向への内在的要因

では、なぜそうなるのか。まずは内在的要因から考えてみたい。

第1に考えられるのは、保健学領域では仮説検証より仮説生成の必要が高いということである。臨床医学の現場では薬効検定が重要なテーマであるが、保健学の各領域はクスリを使うわけではない。クスリに代わるものは何か、今はその見立てが必要なのである。

第2に、保健学領域では、人々の関心がしばしば生物学的レベルよりも行動学的レベルに向かうという事情がある。個人の行動は生物学的機能や意志や認知能力や個人史の複合的所産であるから、その実態は単純化された数値ではとらえきれないという思いがある。観察所見や語りの分析を思い立つゆえんである。

そして第3には、ひとがひとたび個人に関心を持てば、その個人の「意味的世界」に関心を向けざるを得ないという事情がある。保健学とは、ひとが身体と心の健康を維持するのを助ける学術であるとするなら、個人の心情や価値観を避けて通ることはできない。これに近づく手段のひとつは、対象者の語りに耳を傾けることである。

以上の内在的要因が、少なからぬ人々の中に、質的研究への志向と、それを受け入れる素地を生み出している、と私は思う。

・外在的要因としての時代の風

同じような機運はすでに、人間を相手とする他の学問

領域で始まっていた。先鞭をつけたのは人類学、そして社会学である（Denzinほか、2000）。人間集団の文化的事象に対する参与観察の導入と、これに基づく長大なモノグラフの作成は、人類学、社会学いずれの場合も、1920年代あたりから始まったものらしい。そして1950年代から1970年代にかけては、新解釈理論が次々と登場し、質的研究の黄金期を迎えた時期とされる。だが質的研究者たちは、やがてさまざまな矛盾に直面するようになった。1980年代の後半には、“表象の危機”があらわになった。そのような危機をのりこえながら、質的研究の諸学派は命脈を保ち、教育学、心理学その他の諸分野に影響を及ぼしつつ、今日に及んでいる。

保健学領域では看護の専門家たちがいち早くこの質的研究の手法を取り入れた。南（1987, 1999）によれば、グラウンデッド・セオリ - の創始者のひとりStraussが1960年にカリフォルニア大学サンフランシスコ校に就任したのは、当時の看護学部長ナームの招きがあったことだという。ここでStraussは、看護学と社会学の両方の院生を育ててきたと言われる。

このような“外力”の導入は、少しかたちは違うが作業療法の分野でも起こった。1986年に米国作業療法協会が米国作業療法基金と組んで一大研究プロジェクト、クリニカル・リーズニング・スタディを立ち上げたとき、その総指揮を委ねられたのは人類学者Mattinglyであった（鎌倉、1997）。これ以降、同国の作業療法雑誌には、エスノグラフィーその他、質的研究を標榜する論文がかなり目立つようになっていく。

もちろんそれ以前にも、事例研究というジャンルがあったのだから、看護学にしても作業療法学にしても、質的研究がなかったわけではない。しかしそれらが“質的”だと見なされるのはたいてい、それが行動を記述していた、という意味においてである。

だがグラウンデッド・セオリ - やエスノグラフィーがもたらしたインパクトは、そこに留まるものではなかった。それらの真のインパクトは、対象者の“語り”もまた研究の対象になるのだということを教えた点にある。質的研究においては、語りの分析は解釈的になされる。研究とは主観を排除して行うべきもの、と教えられてきた世代にとって、これは革命的なできごとだったと言てよい。

この新しい質的研究は、語りの分析だけでなく、医療者とクライアントの相互作用の分析や考察をも容認するものであった。さらには、それらが起こる文脈の分析や考察をも容認するものであった。患者の症状ではなく心や行動の問題へ、平均像ではなくその人固有の価値や心情へ、軸足を移しつつあった同時代の保健専門職にとって、この研究手法は非常に魅力的に映った。

看護学の領域で質的手法への関心が寄せられるように

なったのは1970年代以降だとされるが（Holloway, 1996, p. 2）、作業療法学の場合は1980年代以降だと見てよい（鎌倉、1997）。

質的研究とはなにか

・質的研究とは

ではここで、質的研究とは何か。あらためてそれを取り上げてみる。

StraussとCorbin（1990）によれば、質的研究とは、非数学的手順による研究のすべてである。統計学的な処理や数量化の手順によっては到達しえないもの、という意味がそこにはこめられている。LoflandとLofland（1995）は、質的研究とは世界への解釈的、自然主義的接近であるという。自然の状況下で対象を観察し、見出された事象の意味を解釈し、記述する研究がそれだということである。DenzinとLincoln（1994）は、質的研究をする者はプリコルールだという。プリコルールとは、プリコラージュを作る人、またはモンタージュあるいはキルトを作る人。つまりはありあわせの物を動員して一つの作品を仕上げる人のことである。

以上の三つは、質的研究の諸側面を非常にうまく述べている。だから、これ以上の説明は不要であろう。質的研究は実証主義的研究にあきたらない人々の中から起こるべくして起こった、第二の研究手法だということができる。

・質的研究の系譜

今日、質的研究にはさまざまな流儀があるように見受けられる。保健学領域でも、論文の筆者たちはそれぞれに、これはエスノグラフィーに基づく研究であるとか、グラウンデッド・セオリ - ・アプローチによる研究であるとかを宣言していることが多い。質的研究のテキストを開けばあちらこちらに、エスノメソドロジー、マイクロエスノグラフィー、現象学的研究、生活史研究、事例研究、フォーカスグループ、アクション・スタディー等々の文字が踊っている。これらは一見、手法の違いを示しているかに見えるが、実は立場の違いを示しているのだと私には思われる。出身母体の違い、関心対象の違い、思想上の主義の違いなどから、それぞれが固有の名称を唱えるようになったのだと思われる。

Hollowayら（1996）は質的研究の系譜として、人類学から起こったエスノグラフィー、社会学から起こったグラウンデッド・セオリ - 、哲学から起こった現象学の3つが重要であるという。確かにこの3つは、看護学や作業療法学の質的研究の中で最も多く目にするものである。私の理解では、エスノグラフィーとは、特定集団の（発端においてはある民族の）文化を理解しようとする

学問である。そのために研究者は、その集団の生活の中に入り込み、ひとびとの活動に参加し、観察し、それを書きとめる。また特定の人物にインタビューを試み、あるいは人々の作品を集める。最後にそれら全てを整理し、考察し、ある結論の創出を試みる。そしてそこに到るまでのプロセスを長大な著作に書きあらわす。

一方、グラウンデッド・セオリーは、ある状況の中での人と人の相互作用について、何らかの理論を見いだそうとする学問である。研究者は人々の相互作用の場面に参加し、観察し、記録する。あるいは当事者にインタビューを試みてそれを記録する。次いでそれらの分析からある解釈を導き、その解釈が普遍的であるかどうかを確かめるために、さらに新たなデータとの照合を試みる。そのような過程をくりかえして最後に、ある理論の創出に到る。

そして現象学は、個々人の内的世界（彼らはこれを“生きられた体験”という）の理解を目指す学問である。そのために研究者は、目当ての対象者に面接し、あるいは参加観察を行う。日記や著述作品を見せてもらうこともある。

このように見てくると、これら三者は、研究の方法としてはおどろくほど似通っていることがわかる。解明しようとする内容や対象の選び方が少しずつ違うのは、人類学、社会学、哲学という出身母体の違いのためだと考えざるを得ない。

質的研究者は何をしているのか

質的研究者のねらいはわかったが、では実際に彼らは何をどうしているのか、というのが多くの人々が抱く疑問である。この疑問はとりわけ、語りの分析に向けられる。実際の論文では、この分析過程が明らかにされないことが多いからである。ここではあえて、ひとつの研究を例に取り、この過程を紹介してみようと思う。これが典型例というわけでは決していないが、何とかして実体を見せなければ、という思いがあるからである。

・世界一短くシンプルな質的研究の話

質的研究に基づく論文は、たいていが長尺物と相場が決まっている。しかしここでは便宜上、最もシンプルで短い質的研究を引用することにする。それは、山崎・鎌倉（2000）の習作、「自閉症児Aの母親が障害児の母親であることに肯定的な意味を見出すまでの心の軌跡」である。

この研究は筆頭著者である山崎があるとき、ある自閉症児の母親が「この子の母親でよかった」と語るのを聞いて、「何がいったいこの母親をこのように成長させたのか、その理由を知りたい」と思ったことに端を発して

いる。悩む母親が多い中で、このような心境にいたった事例の背景を明らかにすることができれば、たとえ1例であっても、自分や他の臨床家たちに有用な参考情報になると考えたのである。手法としては「生活物語の分析」（Frank, 1996）が選ばれた。

Aの母親に彼女の生活物語を語ってもらうため、2回の非構成的面接が組まれた。非構成的面接とは、質問の細目をあらかじめ固定しない面接である。この場合は「Aちゃんが何かふつと違うと感じた時から、Aちゃんの母親でよかったと思われるようになるときまで、Aちゃんを育てていらした時々の思いを、できるだけ詳しく話して下さい」と依頼した。研究目的の面接であることを話し、もしも話をやめたいと思うときがあったらいつでも中止して構わないと告げてあった。

依頼に応じて、Aの母親はつごう3時間にわたって、Aが小学校に入学した少し後まで、数年間におよぶ思いの歴史を語ってくれた。その中には、かつてAの作業療法担当者であった山崎が思っても見なかった事実、たとえば、Aが障害児だとの診断を受けた母親が決してそれを認めようとせず、地域の療育センターに通いつつも、自分が絶対にAを治してみせる、障害児のレッテルをはがしてみせると激しく心に誓っていた日々があったことなどを含んでいた。

面接者は母親のこの語りを文章化して彼女に送り、内容を確認してもらった。母親は承認した。

記述データの分析は次のように行われた。まず、文章化された面接記録を母親の“思い”の最小単位で区切り、これを「区分」と名づけ、連続番号をふった。区分数は全部で108となった。次にこれらの「区分」を内容の類似性によって分類して「思いのカテゴリー」をつくり、そこに現れている思いのある言葉に凝縮させて、それをそのカテゴリーの表題とした（例、「秘めたる不安」）。次にこのカテゴリーをさらに分類して「思いの大カテゴリー」をつくり、これにも表題をつけた（例、「不安」）。この分析作業は、はじめ第1、第2研究者が個々に行い、節目節目で結果をもちよっては協議し、またはじめに戻って個々に分類をやり直し、ということをくり返した。2人の間で本質的な相違はなく、最終的には合意に達した。わずかな不一致に関しては、第1研究者の案を優先させた。

山崎・鎌倉は、こうして得られた思いの大カテゴリーを時系列に従って並べ、これを“Aの母親の思いの変化”と見なすことにした。それは、1)不安、2)闘争、3)運命への順応、4)理解と究明への欲求、5)最適環境の追求、6)自己肯定、という過程を示していた（図）。

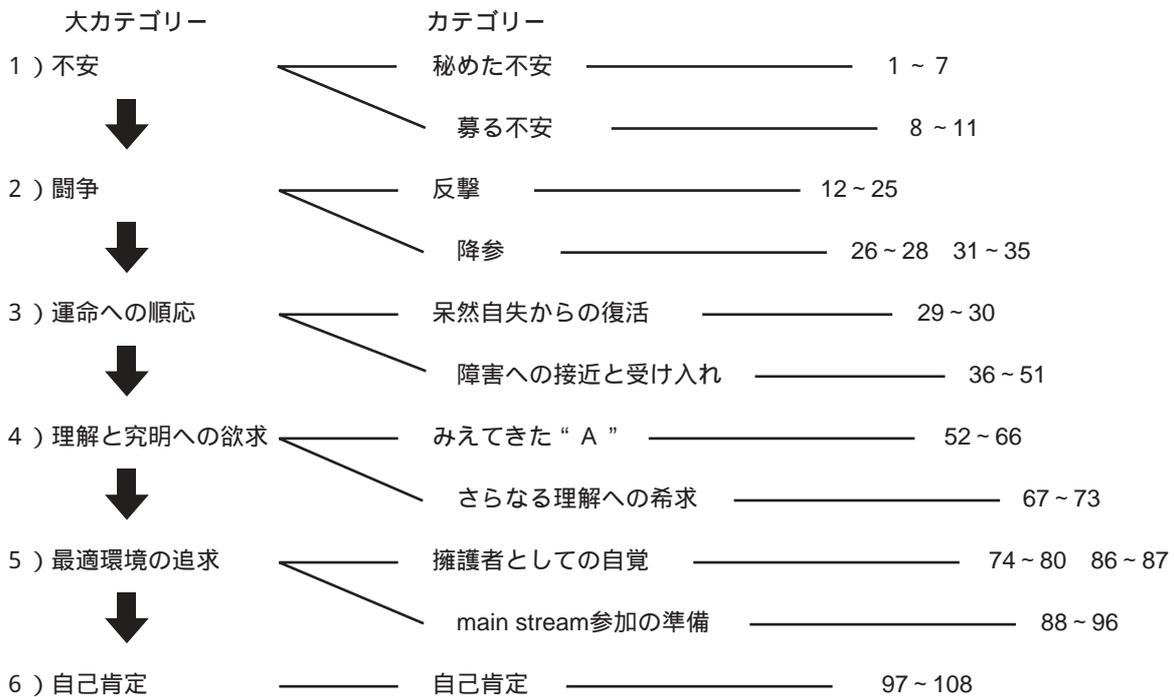
次に2人は、このような変化が何によって促されてきたかを推論してみることにした。そのために、個々の“思いのカテゴリー”が生じた契機を、それに属する

「区分」の記述の中に求めることにした。たとえば、カテゴリーのひとつ「障害への接近と受容」に属する「区分」として、次のものがある。これは、わが子が障害児であることも自分が障害児の親であることも認めず、いつかは必ずそのレッテルをはがしてみせると誓っていた日々の語りの後に出てくるものである。

区分40：「通園バス（の中）で他のお母さんたちが新婚旅行に行った（ときの）話を聞きながら、私は、‘この人たちは特別の人ではなく、私と同じ普通の人なんだ’と気づいた」

区分48：「ある合同保育の時間に先生が‘お母さんを取りかえっこしましょう’と言われた。運悪く隣の子は指が6本あるダウン症の子だった。（中略）仕方なく私は、歌に合わせてその子と遊んだ。その時、膝の上のその子から、普通のこどもを抱いた時と全く同じように子どもの熱気が伝わってきた。（中略）その瞬間、私は1人のかわいい子としてその子を受け入れ、同時に自分の偏見に」気づき、その子たちに謝りたい気持ちになった」

図 母親がAの育児に対して抱いた思いの変化



山崎・鎌倉はこの語りを、家庭外で起こる日常的なできごとが重要なメッセージを帯びる瞬間がある、ということの例として受けとめた。

同様の例はほかのカテゴリーについても見出すことができた。もちろん、同じ経験に対して、誰もが同じ心の転機を得るとは言えないであろう。そこで2人は、Aの母親の、思いの変化を促してきた要因を次のように推論した。それは、日常的なできごとがもたらすメッセージが個人の中に集積されていくとき、家庭外世界との接触から生じるエピソードがある日突然、個人の“内発的な力”の起爆剤としてはたらく、というものである。内発的な力とは、その人に本来具わっている力と個性を想定したものであった。

山崎・鎌倉は、この研究には次のような意義があったと考えた。その1は、障害受容初期にある母親の思いの、ひとつのかたちを理解できたことである。個々の事例を深く理解することは、臨床家としてのセラピストの感受

性を高め、適切な行動の培地を耕すことになると思われた。その2は、日常的なできごとがもたらすメッセージ性を深く認識できたことである。そして第3は、障害児やその親が家庭外世界と交流することの意義を、あらためて認識できたことであった。

・質的データ分析の一般手順

個々の質的研究が採用しているデータ分析の方法は、違っているけれども似ている、似ているけれども違っている、という微妙な関係にある。しかし量的研究とて、データ採取の方法や統計学的解析の方法はさまざまなだから、このことはそれほど驚くにはあたらない。

Popeほか(1999)は質的分析の手順のひとつとして、「フレームワーク・アプローチで用いられるデータ分析の5段階」を紹介している。これなどはさしずめ、標準仕様と言えそうなので、ここに大枠を述べる(以下の表現は、Popeほか(1999)の日本語版訳語と少し異なる)。

- 1) Familiarization (原データになじむこと)
- 2) Identifying a thematic framework (主題構造の特定)
- 3) Indexing (索引づけ)
- 4) Charting (チャート化)
- 5) Mapping and interpretation (マッピングと解釈)

とは言い、質的研究はそもそも発想と手順の柔構造化をめざして生まれたものである。それは何よりも、既成の考え(理論)によって現実を見るのではなく、虚心に現実を見ることの中から新しい考え(理論)を發展させようとしたものであった。グラウンデッド・セオリーの創始者GlaserとStraussの著作にはそのことがくり返し述べられている(Glaser & Strauss, 1967)。手法のマニュアル化を求めれば、たちまち自己矛盾に陥ることになるだろう。その方法が適切かどうかは、論文それ自体の論理性によって説明しなければならないのだと思う。

質的研究者のジレンマ

質的研究者は多くのジレンマを抱えている。それは単一事象よりも複合事象を、物理的事象よりも行動的事象をより多く扱うがゆえのジレンマである。

・質的研究の長所と短所

質的研究の長所は何と言っても、“データへの浸り込み”によって深い分析が得られる点にある。これにより研究者は、“思いもよらない事実”、“思いもよらない考え”に気づく可能性に恵まれる。実際、質的研究を行う者のよるこびはこの1点にかかっているとやってよいだろう。仮説検証型の研究ではあらかじめ自分の頭の中にあることしか確かめることはできないが、質的研究では自分が思っても見なかったことをデータが語ってくれることがあるからである。

だが、短所は多い。その第1は、手続きが柔構造的であるために第三者の不信を買いやすいこと、第2は、分析が解釈依存的であるために、恣意的だと思われやすいことである。そして第3は、観察が文脈依存的であるために、結論の一般化が制約されるということである。これらの点を、少し考えてみる。

・手続きが柔構造的であることについて

質的研究ではデータ収集は緩やかなプランをもって開始され、現場で臨機応変の処置をほどこされる。つまり研究者は、考えながらデータを集める。また、研究者は参与観察(対象者に直接・間接にかかわりながら観察すること)を許される。これは、より自然な文脈の中で事実の発掘に努めたいと願うためである。このような柔構造化は厳密な研究計画の立案とその推進を信条とする量

的研究者の非難的になりやすい。

しかし、柔構造的であることは事実をゆがめるものではない。偶然が加わることもまた事実をゆがめるものではない。データの多様性は論考を複雑にはするが、論考の深さには貢献する。このように考えれば、手続きが柔構造的であることは必ずしも欠点につながるものではないといえることができるであろう。

・解釈依存的であることについて

質的研究は解釈学的研究である。これは、人と人の相互作用は解釈によって成り立っている、との前提から生まれている。このことは誰も否定できないのではあるまいか。たしかに解釈は、個々人によって異なるものではある。しかし、多数の人が共感する一致点というものもまた存在する。これがあるからこそ、私たちは研究をしようと思うのではなからうか。研究者を複数化することは、この一致点への接近を容易にするみちである。

実際に経験してみると、データの理解や解釈は複数研究者の協業によってより深いものとなる。また、ひとりの研究者の感度も修練とともに進化することがわかる。

・文脈依存性という問題

質的研究は“現場主義”をとる。すなわち、現に存在する事象をそのときの文脈もろとも切り取る。場面の数は限られ、参加者の数も限られる。このことは常に、その研究で見出されたことがらには、その文脈にしかあてはまらないという制約を生む。

にもかかわらず文脈をかかえこんだデータの分析が行われるのは、そこでの研究所見が、他の“類似文脈”において有力な判断材料となる、とみなされるからである。ベテランの臨床家がベテランとみなされるわけは、たくさんの類似文脈を知っているからに他ならない。私の好きな言葉に、「柄杓の一杯も大海の一滴」という言葉があるが、特定文脈の分析は柄杓の一杯の分析に相当するものである。もしも多数事例、多数文脈を取り込むことができるなら、その研究は適用範囲のよりひろい理論を創出することになるだろう。

E B P 優位の時代に

質的研究者がなすべきこと

いま保健医療の世界では、EBP(Evidence Based Practice)の考え方がひろく受け入れられている。思いつきによる実践を避け、できる限り明白な根拠にもとづいて臨床実践を展開しようとする考え方である。そしてこの根拠の強さに関して、EBPの推進者たちは5つの水準を設けている(Holm, 2000)。その中で最高位に位置づけられるのはメタアナリシスなど組織的な文献レビ

ユーを根拠とする場合であり、第2位は、無作為統制実験による根拠を用いる場合である。質的研究による根拠は、実は最下位に位置づけられている。

このような時代にあつて、質的研究者はどのような心構えを持つべきであろうか。

量的研究の補完的役割をはたすこと

Millerら(2000)は、量的研究と質的研究とは本来二重らせん構造を成すべきものであるという。量的研究としての群間比較研究からこぼれ落ちる個別性の問題は、質的研究によって補完しなければならないというのである。とりわけ、生物学的分析では対処できない心理社会的問題がそれにあたる。

その例として彼らは、Wiles(1998)の「心臓発作とその回復に関する患者達の認識」という研究をあげている。心臓疾患の発生を減らすには生活習慣の改善が有効であることはすでに疫学的コンセンサスとなっており、実際そのように指導が行われている。が、実際にはこの指導はなかなか効を奏さない。25名に面接を行ったWilesの質的研究は、そのあたりの事情の解明を助けた。

彼女はこの研究において、疫学的データに基づく説明を受けた患者たちが、はじめはそれを信じるものの、やがてはそれよりも“素人の疫学”を尊重するようになる経緯を明らかにした。患者は一定のショック期間を過ぎると、生活習慣を変えても発作に見舞われた例やその逆を知るようになり、結局は運命次第だと考えるにいたって、生活習慣改善の意欲を失うというわけである。量的研究の結果だけを見ていたのでは事態改善のきっかけがつかめないことをこの研究は告げたことになる。

分析と推論の過程を公開すること

量的研究者たちはふつう実証主義者である。彼らが質的研究者に対して抱く最大の疑念は、なぜあなた方はデータの処理と推論の過程を論文の中で明らかにしないのか、という点にあると言ってよい。この疑念を晴らさない限り、質的研究者は量的研究者の理解を得ることはできないのではなからうか。一度でも実証主義の洗礼を受けたことがある者にとって、過程説明のない理論提示は、手前勝手な主張としか映らないからである。

心理学者や社会学者の中には、手順や過程の説明はできないと公然と言う人がある。何度も試行錯誤を重ねる過程を一々説明する気にはなれないし、大事なものは結論だ、と言いたいのかも知れない。しかし、どんなことでも、その意志さえあれば説明はできるものだし、しなければならぬのだと私は思う。

“方法主義”に陥らないこと

方法主義という言葉は、私は鷲田清一(1999)の著作の中で学んだ。彼はこの言葉を、方法とは本来、対象がこちらに強いてくるものだという文脈の中で使っている。手段にばかり拘泥していると、肝心な仕事に取りかかれなくなる。彼は現象学を創始したフッサールの晩年のエピソードを次のように紹介している。「(フッサールは)晩年にひとりの弟子にこうもらしたという。じぶんは幼少のころ、小刀をもらったことがあるが、その刃先があまり鋭くないので、切れ味がよくなるよう、じぶんでそれを何度も何度も研いだ。が、研ぐことに夢中になっているうちに、気がつけば刃はなににもないほどすり減ってしまっていた、と。そうして悲しげな表情をしたという」(p.33)。

質的研究にはたしかにいろいろな流儀があるが、それはそれぞれの分野の問題意識に根ざしたものであった。その流れに立って考えれば、自分の研究疑問を解くにはどうすればよいかを考えることが基本となるべきであつて、既存の流儀にあわせて自分の研究を展開しようとするのは本末転倒である。そのような意識をもった上で、他分野の実績を参考にすべきだと思う。

その研究を行うことの必要を理解してもらうこと

質的研究を行う意義は、量的研究では解くことができない答えをさがすところにある。そのことの必然性を研究の当事者がしっかり意識し、説明に努める必要がある。

結果を適用できる範囲を明言することも研究者の責任である。なぜその対象者を選んだのか、どのような経緯を経てその対象者にたどりついたのか、それらを明らかにする責任は、量的研究を行う場合と同様、質的研究を行う者にもある。

“思いもよらない発見”を楽しみに、長い労苦に耐えること

たいいていの質的研究において研究者は、大量のデータの海に溺れそうな経験を味わう。目的をしっかりと見据えて論考を重ねる気構えがなければ、全過程を乗り切れることは困難である。

私はさきに、データへの浸りこみから思わぬ発見が生まれると書いたが、こういう表現が初心者の(とは言え、私もベテランというわけではないが)誤解を招くと気づかされたこともある。データを漫然と眺めているときに、“何か”が扉をたたいて向こうから訪れてくることはない。データを何回も読み、そこからある意味を汲みとり、それが正しいかどうかを確かめるためにまたデータを読む。このくり返しの中からこそ、新しい何かが立ち上がる。その意味で、Glazer &

Strauss (1967) の “ The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research ” の訳者たちが、日本語版表題を「データ対話型理論の発見 . 調査からいかに理論をうみだすか」としたのは全く正当である . データとの深く長い対話の果てに、自分をも他人をも納得させられる見解(理論)を生み出すこと、これが質的研究を行う者の目標である .

文 献

- 1 . Denzin, N.K. and Lincoln, Y.S.: The discipline and practice of qualitative research. In Denzin & Lincoln (eds): Handbook of Qualitative Research, pp.1-28, Sage Publ., Thousand Oaks, 2000
- 2 . Frank, G.: Life histories in occupational therapy clinical practice. Am. J. Occup. Ther. 50:251-264, 1996
- 3 . B.G.グレイザー & A.L.ストラウス (後藤 他訳) : データ対話型理論の発見 . 調査からいかに理論をうみだすか . 新曜社, 東京, 1996 (原書はGlaser B. & Strauss, A.L.: The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research, Aldine Publ. Co., 1967)
- 4 . Holm, M.B.: The 2000 Eleanor Clarke Slagle Lecture. Our mandate for the new millennium: Evidence-based practice. Amer. J. Occup. Ther. 54:575-585, 2000
- 5 . Holloway, I. A. & Wheeler, S.: Qualitative Research for Nurses. Blackwell Science Ltd., Malden, 1996 (ホロウェイ + ウィーラー, 野口監訳 : ナースのための質的研究入門 - 研究方法から論文作成まで . 医学書院, 東京2000)
- 6 . 鎌倉矩子, 大村道子, 石井晴美 他 : 健常種の把握の様式 - 分類の試み . リハビリテーション医学, 15:65-82, 1978
- 7 . Kamakura, N., Matsuo, M., Ishii, H., et al.: Patterns of static prehension in normal hands. Amer. J. Occup. Ther., 34:437-445, 1980
- 8 . 鎌倉矩子, 三星史子, 浅海奈津実 他 : 物体の操作における健常手の動きのパターン . リハビリテーション医学, 23:59-67, 1986
- 9 . 鎌倉矩子 : 手のかたち 手のうごき . 医歯薬出版, 東京, 1989
- 10 . 鎌倉矩子 : 作業療法と研究 . 鎌倉・宮前・清水 : 作業療法士のための研究法入門, pp.9-22, 三輪書店, 東京, 1997
- 11 . Lofland, J. & Lofland, L.H.: Analyzing Social Settings. A Guide to Qualitative Observation and Analysis. 3rd ed., pp.6-7, Wadsworth Publ., Co.Belmont, 1995 (L.ロフランド & L.ロフランド, 進藤他訳 : 社会状況の分析 - 質的観察と分析の方法, p.8, 恒星社厚生閣, 東京, 1997)
- 12 . 松尾道子, 鎌倉矩子, 三星文子 他 : 把握以外の静的な手の使用様式 - (その1) フォームの分類の試み - . 総合リハビリテーション, 7:773-784, 1979
- 13 . Miller, W.L. & Crabtree, B. F.: Clinical research. In Denzin & Lincoln (eds): Handbook of Qualitative Research, pp.607-631, Sage Publ., Co. Thousand Oaks, 2000
- 14 . 南 裕子 : 監訳者あとがき . Strauss, A.L., et al. (南裕子監訳) : 慢性疾患を生きる - ケアとクオリティ・ライフの接点 . pp . 287-292, 医学書院, 東京, 1987
- 15 . 南 裕子 : 監訳者序 . Strauss, A.L. & Corbin J. (南裕子監訳) : 質的研究の基礎 - グラウンデッド・セオリ - の技法と手順 . PP . iii - v, 医学書院, 東京, 1999
- 16 . Pope, C. & Mays, N.: Qualitative Research in Health Care. 2nd ed., pp.75-88, BMJ Books, London, 1999 (キャサリン・ポープ他, 大滝淳司監訳, 質的研究実践ガイド - 保健・医療サービスの向上のために . pp . 74-85, 医学書院, 東京, 2001)
- 17 . 清水 一 : 研究疑問と研究の様式 . 鎌倉・宮前・清水 : 作業療法士のための研究法入門, p.23-32, 三輪書店, 東京, 1997
- 18 . Strauss, A.L. & Corbin, J. (南裕子監訳) : 質的研究の基礎 - グラウンデッド・セオリ - の技法と手順 . pp . 11-12, 医学書院, 東京, 1999
- 19 . Wiles, R.: Patients' perception of their heart attack and recovery: The influence of epidemiological "evidence" and personal experience. Soc. Sci. Med. 46:1477-86, 1998
- 20 . 鷺田清一 : 「聴くことの力」 - 臨床哲学試論 . TBSブリタニカ, 東京. 1999
- 21 . 山崎せつ子, 鎌倉矩子 : 自閉症児Aの母親が障害児の母親であることに肯定的な意味を見出すまでの心の軌跡, 作業療法, 19(5), 434-444, 2000